

松山大学論集
第二十八卷第四号
平成二十八年十月
発行

高島亀太郎と華宵の私的記録

——兄弟が歩んだ道の再考——

高
島
麻
子

高島亀太郎と華宵の私的記録

——兄弟が歩んだ道の再考——

高 島 麻 子

はじめに

明治三十年、丁酉ノ歳ナリ。吾将来立身上最必用ニシテ且最注意ヲ要スベキ年ナレバ、本年ヨリハ一層業務ヲ勉励シ、他日完全ニシテ有為ノ者トナランコトヲ期ス。

このような書き出しで高島亀太郎の日記（以下、亀太郎日記）は始まっている。明治三十年一月、亀太郎が十三歳、宇和島高等小学校最終学年の正月である。同年の三月に高等小学校を首席で卒業し、学業優秀な亀太郎は学者になることを夢見て、中学校への進学を希望していたが、父和三郎の「商人に学問は不要」という偏った思い込みにより学業を断念しなければならなかった。四月からは家業の生糸商を手伝うこととなる。そんな少年亀太郎の人生の最初の分岐点となる年から亀太郎日記は始まり、没年の昭和四十七年六月まで淡々と記され続けている。

高島亀太郎は明治十六年二月六日、愛媛県北宇和郡宇和島裡町四丁目に高島和三郎・チヨの長男として誕生（後に弟妹は七人となった）、明治三十七年に父和三郎急逝により、弱冠二十一歳で家督を相続した。大正期に入ると、家業を生糸商から製糸工場経営へと転換し、実業家としてのキャリアを積み重ねていく。一方で明治三十四年に設立された宇和島実業青年会（後の宇和島商工会／宇和島商工会議所）に参加し、地域の活性化にも尽力、その延長として早くから政治にも関わり始め、明治四十四年に宇和島町議会議員選挙で初当選をする。その後は愛媛県議会議員、宇和島市議会議員、衆議院議員、宇和島市長を務めることとなる。

その亀太郎の弟が大正ロマンの画家として一世を風靡した高島華宵である。明治二十一年四月六日に生まれた華宵は、亀太郎と同じく、高等小学校卒業後は中学へは進学せず、絵画修業のために十四歳で故郷を出ている。

一九九〇年、高島華宵の個人美術館である高島華宵大正ロマン館が開館した。華宵芸術や華宵自身の人生、大正大衆文化の顕彰を目的とした当美術館の開館当初のコレクションの基盤は、宇和島の実家に残されていた作品資料であった。開館準備のための資料整理によって、華宵作品や関連資料（遺品や華宵書簡、写真、大正生活資料など）は美術館の館蔵品となったが、それ以外の資料は高島家に残されたままであった。

一九九三年、高島華宵大正ロマン館の学芸員らによって、残された高島家の資料整理が開始された。そこには江戸末期から昭和四十年代頃までの高島家関連の資料、つまり「亀太郎が、生涯にわたって、自分がかわり、受け取った資料類や手紙等」のほか、「父の和三郎や祖父の英三、また妻、兄妹、そして子供たちの資料」や「家業関係のもの（生糸商、製糸業、木工会社、家賃関係等）、商工会・商工会議所関係のもの（実業青年会、商工会、商工会議所等）、政治関係のもの（町会、市会、県会、衆議院議員等）、亀太郎の書簡、亀太郎の日記、俳句・趣味関係のもの、教科書類など」¹⁾が雑然と置かれてあった。これらを大まかに分類した上で、資

料のさらなる活用のために松山大学に約三万点が寄託された。大学においてより綿密に整理・分類が行われたこれらの資料は、『高畠亀太郎文庫資料目録』（一九九六年）としてまとめられている。

この資料の中にあつた亀太郎日記を解読するため、川東埤弘先生を中心とした研究者によつて「高畠亀太郎日記研究会」が発足し、解読作業を重ねたのち、『高畠亀太郎日記』の出版に至つたのである。亀太郎が記した日記は七十六年間に及び（現存するのは五十六年分）、明治三十年から昭和二十年までの日記は『高畠亀太郎日記』として、愛媛新聞社から一九九九年より順次出版された（全六巻）。

高畠家に残されていた資料の中には、華宵から実家に宛てた書簡約二〇〇通が残されており、これらは華宵の生涯や動向を知る上で大変貴重な資料である。華宵書簡と亀太郎日記とを併せて読むと、片方だけでは知り得なかつた出来事が見えてくると同時に、生涯にわたる兄弟の交流の実態が分かる。

本稿では、亀太郎日記と華宵書簡を読み比べながら、二人の長期間にわたる交流の中から、実業家・政治家・長男として宇和島を拠点に生きた亀太郎と、宇和島を離れて芸術家として生きた華宵という二人について考察を試みたい。特に父母や兄弟姉妹といった家族との関わり方、そしてこれまであまり知られていない晩年の華宵と亀太郎の交流を明らかにしていく。

日記文は、昭和二十年以前のもは『高畠亀太郎日記』（愛媛新聞社、全六巻）より、昭和二十年以降のものは日記本体から引用した。本文では引用部分を記載する際、以下のように表記する。

「亀①」明治三十年～明治三十八年分

「亀②」明治三十九年～明治四十五年分

「亀③」大正二年～大正十五年分

「亀④」昭和二年～昭和七年分

「亀⑤」昭和八年～昭和十六年分

「亀⑥」昭和十七年～昭和二十年分

「亀太郎日記」昭和二十一年以降の原本

また華宵の書簡については、全て実際の手紙より引用した。本文では引用のあとに、差出年月日と宛先人を表記する。

第一章 父和三郎

亀太郎日記から読み解いた亀太郎の生涯や宇和島を中心とした政治経済の動きについては、『高畠亀太郎伝―南伊予政治経済史』（川東輝弘著、ミネルヴァ書房、二〇〇四年）に詳しい。ここでは亀太郎と華宵の兄弟関係についても触れられているが、それは亀太郎から見た華宵との出来事が中心である。愛媛県出身の作家高橋光子の『高畠華宵とその兄』（高橋光子著、潮出版社、一九九三年）は、高畠華宵大正ロマン館が資料を提供して、華宵の生涯を追った評伝であるが、こちらは華宵を中心とした兄弟関係が描かれている。

これらの評伝から浮かび上がる亀太郎と華宵の人物像は、非常に対称的であることが分かる。亀太郎日記は淡々と客観的に事実を記しながら、所々に亀太郎の所感が織り込まれていて、とても読みやすかつ読み手を惹き付ける文章力を感じさせる。一方華宵の書簡は、物ごとに対しての非常に細密な観察力と思い入れを感じさせる表現が目立つが、時に主観的すぎるほど自己中心的な文体が目立つ。逆に言えば華宵の感受性の豊かさと繊細さが伝わって来る文章である。

こうした正反対の性格を持つ兄弟にとって、父はどのような存在であったのだろうか。明治の家父長制度に

において、父親の存在は絶対的であり、家族の人生（進学、就職、結婚など）は父親の采配に依るところが大きかった。亀太郎と華宵も例外ではない。

後年、亀太郎は父和三郎について、「自分の父を余り厳格でむつかしすぎるので兎角悪くはいうものの」と断った上で、「一面非常な勤勉家で気質一方の人格者であった。少し小心な嫌はあるが極めて生真面目で何事も約束を間違えたことなく、浮いた遊びをした様子もなく、年中儉約一方の生活ぶりである点中小商業家としては誠に敬服すべき人物であった」と評している^②。

しかし十代の頃の亀太郎日記には、父への恐怖心や疑念が記されている。

* 父ト共二井戸端ヨリ横丁へ出ヅル下水ノ疎通ヲナス。余ノ無能ヲ責メラル、コト数度。然レドモ自ラ之ヲ制シテ堪ユ。（亀①、七頁）

* 今夜新聞ヲ読マントセシニ、過テ破リ、父ノ責メヲ恐れ、狼狽シテ二階ニ上リ就眠ス。（亀①、一三頁）

* 父ハ常ニ店頭ニテ人々ト将暮ヲサセリ。日トシテ之ヲナサルコト殆ドナカリキ。故ニ余ハ少シク其後ヲ慮レリ。（亀①、一五頁）

明治三十二年になると（明治三十一年の日記は所在不明）、「父ト共ニ下家ニテ玉蘭、屑物ノ目調べ、荷造ヲナシ」「父ト計算ヲナシ」といった記述や、銀行等取引先へ出かけるといった記述が多くなる。高等小学校卒業後二年目（十六歳）にして、父の片腕として家業に邁進しているようである。しかし父の商売のやり方や亀太郎自身の将来への見解の相違など、この年の総括部分には、父への複雑な思いが綴られている。

* 元来父ノ性質トシテ、凡テ事物ヲ為スニ、一意熱心、善ク精勵スルト雖、只小心翼々トシテ、苟モ危道ヲ踏マズ、所謂門外百里ノ明ナク、虎穴ニ入りテ虎子ヲ獲ルノ膽略ハ無キ人ナリ。故ニ商業ヲ営ム手堅キ一方ニシテ、相場少シク下落スレバ惣ニシテ元氣沮耗シ、臨時モ耐持スルコト能ハズ。例ヘバ一時市場暫ク沈静ニシテ、送品ノ売行鈍滞シタル時ノ如キ、日夜頭痛シンシントシテ、徒ニ歎嗟ノ声ヲ発スルノミ。偏ニ売急ギノ傾アリ。相場稍恢復スルニ際シテ、皆売放シ悉シタルヲ以テ、後日大々暴騰ノ節ニハ亦一品ヲダニ止メザリシハ実ニ遺憾ニ堪ヘザル所ナリ。(亀①、一〇三頁)

こうした父への不信感と反発心は、思春期の青年が抱く共通した想いとは言え、亀太郎の場合はさらに明確な理由があった。それは晩年になっても消し去る事ができなかった、学問探求への道を父によって閉ざされたという想いである。小学校始まって以来の秀才と言われたほど優秀な亀太郎が高等小学校二年の時から学制が改まり、中学進学への道が開けた。三年時になると同級生の多くが中学校へ進学したという。

* 勿論自分も父に願ったがテンデ耳を貸さない。商人の子は中学などへ行く必要がない。学者にしても仕方がないの一点張りである。中小商業家としては誠に良い父ではあるが、この点になると全然無理解であった。無理解というよりは時勢の変化が判らないのである。(略)伊達家の高木さんが善く出来る兒だから、奨学資金を出す⁽³⁾と云って来られたとき父が断っているのを陰で聴いて泣いたこともあった。(略)この中学へ入らなかつたことが自分の一生の運命を支配し、大飛躍の世界に立ち得ずして型にはまつた小人物に⁽³⁾つて今この七十七年の回顧録を書いているのである。

この年（明治三十二年）、父和三郎への反発心が高じて、亀太郎は実家から離れて独立する事を考えていたようである。大阪でどこかの商家に奉公し、いずれは独立をしたいという気持ちが強くなっていた。和三郎に相談するも反対され、悶々とした日々を過ごした後、「断然家ヲ棄テ、天ノ一涯ニ飛バント欲」するが、結局は「忽チ齟齬シ、亦失敗ニ終」ってしまった。しかしこの挫折経験により「漸ク他ノ方面ニ転向」しようと考え、父の跡取りとしての道をしっかりと歩む覚悟ができたようである。真正面から父と衝突するのではなく、父のやり方をじっくりと学んだ上で、徐々に自分のやり方を模索し実行する、そのために自己研鑽を続けるという亀太郎なりの処世術修得に至っている。

* 稍苟且一日ノ安ヲ偷ムノ嫌アリト雖、一事一物機ヲ視テ策ヲ施シ、徐々ニ吾方針ニ近カシメントスルナリ。故ニ万事父ニ服従シ、其指揮ニ応ジテ、日夜商務ヲ精勤シタルヲ以テ、漸ク其信任ヲ増シ、暗々裡ニ少シク所思ノ一端ヲ実行スルコトヲ得ントスルニ至レリ。サレバ吾腦裏ノ擾^マ（憂）鬱ハ次第ニ消散シテ、平静ニ帰シ、嘗テ旧師、学友ニ遇フラダニ厭ヒタル辟頑偏屈ノ氣風ヲ脱シテ、漸次社交ヲ広メントシ、胸中少シク快活、優長ヲ覺ユルニ至レルヲ以テ、晩夏ノ候ヨリハ、商務ノ余暇、実用ノ学ヲ独習シ、以テ他日ニ資セントナセリ。（亀①、一〇五頁）

父との確執を克服しようとする決意によって、亀太郎は新たな視野を得て、さらには父の反対によって進学できなかったという学歴コンプレックスをも乗り越えようとする強い意志を持つに至ったのである。

長男という宿命を背負った亀太郎に対する頑な父の態度に比べると、次男の華宵に対して父は比較的寛容であつたと思われる。もちろん少年期の華宵にとっては厳しい父親であつたに違いないが、進路については周囲

の助言を受け入れ、一定の理解を示している。

* 兄も姉も弟も学校はいつも首席で通していましたが、私は優等でこそあれ、大抵六七番にしかありません。まるで勉強しないうへに、数学が全然駄目でしたから、父は「この子は馬鹿だ」ときめてしまいました。「馬鹿だ馬鹿だ。そんなことでは出世も出来ないから、中学へ入れるどころぢやない、お寺にやるか呉服屋の小僧にでもする」とよく父から云はれました。

（華宵絵物語（二）、「日本少年」、実業之日本社、大正十五年五月号）

華宵は父についてこのように回想しているが、少年時代にはやはり、亀太郎と同じく、父親に対しては一定の距離感を感じていたのであろう。明治三十五年四月、高等小学校を卒業した華宵は、父に連れられて上阪している。華宵が十四歳になったばかりのことである。華宵から父に宛てた書簡は数通のみ残されている。色々と書簡による行き来はあったと推察されるが、残念ながら散逸したと思われる。よって華宵と父との関係を語る言葉はほとんど残されていないのであるが、残された書簡から伝わってくるのは、やはり父に対して華宵が抱いていた緊張感と距離感である。

* 拝啓 大暑の砌、御一向様御無事の由、大賀の至りに候。小生も無事。御大意下さるや候。さて、月謝の儀は高畑にて拝借致居候处、七月分の食料も高畑にて拝借致すべきか、御尋ね申上候。先は用事のみ。

（明治三十五年七月二十六日、大阪より父和三郎宛書簡）

何とも畏まった手紙であるが、この書簡には「天神祭見物」という題を付けて、祭好きの華宵が初めて目にした天神祭の様子を記した一文も同封されている。それと一緒に、母チヨ宛の書簡も同封されていた。父への手紙と比して母へのそれは、少年が母に甘える様子がうかがえる。

* 拝啓。先日申上候帯の儀は、何の御返事も無き候故、を、かた御送り下さるものと存、毎日、今日は来るか明日は来るかと待居候ひしに、天神祭の今日迄、何の事も無く候。御送り下さらずば眞御返事下され度くならん。御送りなれば、祭日迄には来るならんと日に待ち申候が、如何に候や。御送りは無き候やも伺ひ申候。以上。

御無理にては候へ共、父上にないしよにて、ちりめん一筋御来ぬ下さる事かのつまじく候や。御返事待つ。結局、この帯については、先の書簡を出した二六日には高畑（大阪中之島の親戚）に届いていたようで、八月五日の母宛の書簡には、その礼が記されている。また同書と一緒に平井直水塾で描いた一枚の絵を送っており、「つまらぬ粗画には候へ共、一枚御送り申候間。父上にも御見せ下され度く候。」とある。このように直接ではなく、母を通して父とつながっていたようで、そこに父と華宵との微妙な距離感を感じるのである。

亀太郎にしろ華宵にしろ、共通して父和三郎へ心理的な距離感を抱いていたことが、日記や書簡の記述から推察される。家父長制度という当時の社会制度や思春期の少年の心情を鑑みると、ある程度は当然とも言えるが、長男の亀太郎が自己の夢を断念させられたこと、次男の華宵が希望通りの絵画修業の道へ進んだことに、この時代の商家の現実を見る思いがする。

前述のように、明治三十二年に自らの人生の処し方を決意した亀太郎であったが、明治三十七年に父が亡く

なるまで（この年の日記は散逸）の日記には、他の家族に比べ、父に関する記述が多いことが特徴である。単に父の行動（外出、出張等）の事実のみを記す場合が多いが、短い記述ながら父の様子を追記しているところも多々あり、常に父親の動向を亀太郎が気にしていたことがわかる。

* 待子ニ待子タル京都初売ハ、至テ薄手合ニシテ、五七円直押ス旨中井ヨリ入電アリテ、父弱リ居レリ。

（亀①、一一三〜一二四頁）

* 昨冬以後、其時ハ頗安シト思ヒテ買入タル品モ、又々損失トナリテ成行致方ナケレバ、本日モ特最優劣個余ヲ四二五ニテ売リタルガ、父大ニ弱リ居レリ。（亀①、一二二頁）

* 父ト相談ノ上四〇ニニテ其步入糸ヲ売ルコトニ略取極メテ帰レリ。（略）父ハ逆上ニテ、夜遂ニ臥蓐シ、（略）父不快ナルヲ以テ商談ハ明日ノコト、ナセリ。（亀①、一五〇頁）

* 夕場七九一、氣配益悪シ。父、新聞ニ依リ日露形勢ノ大ニ危キヲ見テ、頻リニ其糸価ニ影響センコトヲ氣遣ヒ、遂ニ頭ヲ冷サシムルニ至ル。心弱シト云フベシ。（亀①、一五三頁）

* 過日來不売行ヲ嘆ジ居タル際ナレバ、父此電報ニ接シ、大ニ喜ビテ家内一同へそばヲ奢レリ。

（亀①、一五八〜一五九頁）

刻々と変わる、父の様子を日々気にする亀太郎である。元來氣の小ささがすぐに体調に影響する和三郎は、頭痛や心臓、内臓などの病を時々発症していた。こうした父を、良きに付け悪しきに付け、一番身近に感じていたのが亀太郎であった。父を見ながら、長男としての自覚を身につけて来た亀太郎であるが、弟妹のことについても、徐々に責任感を持つようになっていた。中村家へ養女にいったすぐ下の妹ハルの婚姻について、事

前に何も知らされなかったことに憤慨したり、華宵（幸吉）の進路について、父に意見する様子が日記に記されている。

* 数年前ヨリ中村惣八氏方ノ養女トナリ居ル妹ハルニ、松丸ヨリ婿養子（未ダ其名ヲ知ラズ、二十五歳ナリト云フ）ヲ迎フルコト、ナリ、今夜高畠秋松氏方ニテ婚礼アル旨今日母ヨリ聞ケリ。是迄予ニハ少シモ告ゲザリシナリ。（亀①、二二四頁）

* 夜、幸吉ヲ中学校へ入学セシメントスルコトニ就キテ、父と議論シタレドモ、遂ニ入学セシメズシテ高等小学四学年へ置クコト、ナレリ。（亀①、一五二頁）

明治三十七年九月十三日に、父和三郎が四十歳で逝去し、亀太郎が弱冠二十一歳で家長となる。家長としての自覚はすでに充分備わっていたことは、これら弟妹についての記述からも窺い知る事ができる。明治三十七年の日記が残っていないため、当時の亀太郎の心情を知ることができないが、その後は、華宵の絵画修業を続けさせ（本来であれば華宵は実家で亀太郎をサポートするべき立場である）、他の弟妹たちも中学校や商業学校、女学校に通わせている。

第二章 母子と弟妹たち

父和三郎についての記述に比べると、亀太郎日記には母についての記述はそれほど多くない。父について商売関係の付き合いや外出についても事細かく記していたが、母については外出云々等の記述は、遠方への旅行

以外はほとんど見られない。弟妹たちについても、進学進級などの節目の記述が多く、家族の日常生活の様子はほとんど綴られていない。

亀太郎は長生きして、父母弟妹すべてを見送っている。普段は淡々と事実を日記に記す亀太郎であるが、彼らの死についての記述からは、情に厚い亀太郎の一面が浮かび上がってくる。

明治三十六年一月十三日～二十七日には生後六ヵ月余りの妹トヨについての記述がたびたびある。(以下トヨに關しての記述は全て「亀①」より引用)

* 妹トヨ俄二ひきつけヲ催シ(略) 其後発熱ノ為、身体未ダ全ク旧復セズ。(二月十三日)

* 妹トヨノ病氣、稍快方ナレドモ、未ダ全快セズ。(二月十四日)

* トヨ其後発熱甚シク、終夜泣ク。(二月十七日)

* トヨ其後次第ニ衰弱一方ニテ、經過面白カラザル(略)。(二月二十一日)

* 妹トヨノ病氣ニ就テハ、母ハ勿論、田村ミツノ如キモ、日夜看護ニ努メタレドモ、胃腸病ノ外ニ、過日丹毒ヲ併發シテヨリ、病勢漸々重クシテ、昨日ハ終日昏眠ノ内ニ經過シタルガ、本日ハ朝来眠ラズシテ、腹部緊張ノ為メ呻吟ノ声ヲ絶タズ、益危篤ノ状態ニ陥レリ。(略) 十一時二十分ニ至リ、母ノ乳房ヲ啣マセントスルトキ、終ニ眠ルガ如クニ息絶ヘタリ。(略) 父母ヲ始メ一同ノ悲嘆殆名状スベカラズ。(略) 噫、家中最愛ノ嬰兒生シテ僅ニ七ヶ月余、溘然逝キテ復帰ラズ。何等ノ慘事ゾヤ。(二月二十二日)

亀太郎には華宵のほかに、実(三男)と義雄(四男)という二人の弟がいた。亀太郎は実には宇和島町立商業学校を経て、八幡浜商業学校へも進学させるなど中等教育を受けさせ、四男の義雄も宇和島中学から東京の

高等商船学校へ進学させているが、中等教育を受けさせてもらえなかった無念を弟たちに味わせたくなかったからであろうか。しかし、大正期に実と義雄はともに若くして亡くなってしまった。

八幡浜商業高校卒業後（明治四十四年三月）の実の行動は断片的にしか判っていない。実業之日本社へ入社、広島 of 工兵第五大隊に志願兵として入営（大正二年）、翌年の除隊後、精神的に不安定となる。実家、東京、京都などを行き来するも、詳細は不明。一時期東京の華宵宅にも同居していた。大正七年五月以降は実家に帰っていたが、精神の錯乱状態は深刻化していたようで、別棟に軟禁されていたようである。

* 裏ノ監置室ニアル弟実、近頃ハ以前ノ如ク乱暴ヲナサズ。拳動穏和トナリ、最近稍身体ニ水腫ノ気味見エ居タルガ、昨日夜ニ入りテ腹痛ヲ訴フルヲ以テ、其手当ヲナシ与エタルニ、今晩ニ至リテ心臓衰弱ニテ急変シ、福田医師ヲ招キタレドモ及バズ、午前七時頃終ニ死去シタリ。不幸精神病ニ罹リテヨリ五ヶ年、其間或ハ監置シ、或ハ諸方ヲ放浪スルコト数次、昨年五月京都ヨリ保護シ帰リシ以来ハ監置ヲ続ケ来リシニ、今ヤ空シ、寔ニ悲哉。（亀③、一二五頁）

同年九月に、亀太郎は愛媛県議員に立候補しており、その準備に奔走していたためか、実の死（九月十二日）の翌日にまず火葬をし、選挙が終わった翌々日（九月二十八日）に葬儀を執り行っている。実は享年二十六歳であった。

華宵も一時期東京で実を寄宿させていたが、実の素行についての苦情の手紙を兄姉宛に送っている。日記に記された亀太郎の冷静な対応と対称的に、華宵は実の素行について、ありったけの感情をぶつけている。

* さてもうもつ毎度毎度の事にてうるさくも思召されんが、此の書いのに私はもつてもやりきれ申さず候。例の実儀、どうしてこんなかと信に信に悲しく候。国に居る頃は如何でしたか知りませぬが、只私に対する行為だけは、どう思つてもにくらしい奴と存じ候。(略) もう私は此んな手紙をかくのもつらい。母上なり貴汝なりに申上れば、只がまんして世話せよ。只其ればかり。実にお小言をお仰かとか知らぬが、やっぱり同じ事。

其れに国の実兄から只の一度も頼むと云ふ御手紙もいただきませぬ。此ふまで私を馬鹿にされて…。(略) ちえ、残念残念。姉様の申では、実をやわらめる事は出来ませぬか。ではどうしても私にばかり苦痛をさして、其れで国の方々は平気でお出になるのでしょうか。(略) もうどうにもがまんが出来ませんから、私は私の方からにげ出します。(大正二年八月十五日、姉ハル宛書簡)

* 過日も姉上に迄もうしあげた、実に毎日の事にて小生のどちらも御聞あきの事とは存じ候へど、誠に小生程わりにあわぬ馬鹿馬鹿しい運命も少なきと存じ候。彼奴(実)にも困り入り候。いつもいつも感情を荒らげる事ばかりにて、其のつど仕事も手につかぬ程、小生の気はいらだち申候。云ふ迄もなく小生の世話になりおらば、殊に弟としても、兄に従順なるは当然の事に候へど、此奴程迄フテプテしい奴は見た事も云なく、此ふ迄事々に不快の言行をされて、小生の感情をみだされプチコツされて迄、兄は弟を世話せねばならぬものに候や。(大正二年八月頃?、兄亀太郎宛書簡)

かなりヒステリックに書きなぐり、華宵の我慢も限界ということだろうか。その後十月頃までには、実は華宵宅を出て自立(?)しているようである。ただし行き先を告げていないことから、けんか別れをしたと考えられる。この後、華宵からの書簡に実についての記述があるものは残っていない。兄弟間のしこりを残したまま、

実は華宵と別れ、大正八年に亡くなったのであろうか。

大正十一年十二月、四男義雄が亡くなる。義雄は宇和島中学を卒業後（大正四年三月）、東京の高等商船学校に学び、卒業後は遠洋航海士として働いていた。華宵を含めた家族と義雄の関係は、先に紹介したような実とのそれに比べれば、大変良好であった。大正三年には宇和島中学卒業後の進路について相談をしてきた義雄あてに、華宵は長文の書簡を送って、兄としてのアドバイスをしている。⁽⁴⁾商船学校へ進学し、遠洋航海士になった義雄は、当時東京にいた華宵宅へたびたび寄宿していた。大正十一年十二月八日、義雄の訃報が亀太郎のもとへ届く。

* 東京幸吉宅二寄寓中ナリシ弟義雄ハ、病氣ニテ先般来入院シ居タリシガ、慢性腹膜炎ハ稍危機ヲ脱シタルモ、身体衰弱甚シク危篤トノ来電、宇和島ヨリ電話ニテ報ジ来リ、次デ本日午後三時死去ノ旨来報アリ。熟慮ノ結果、弟幸吉ニ頼ミテ、不取敢火葬ニ附サシメ、予ハ数日後県会終了次第上京スルコト、シ、其由打電ス。義雄ハ今夏帰郷後、マリ子ト共ニ上京シタリシガ、終ニ永別トナル。哀悼ニ堪ヘザルナリ。則チ今夜ノ知事招待宴ヲ辞シ、旅舎ニ謹慎シテ、遥ニ東都ノ空ヲ懷ヒ、追惜ノ意ヲ表ス。（電③、一五五頁）

県議会が開催中であつたため、火葬等は華宵（幸吉）に託し、義雄の死後一週間しようやく上京している。興味深いのは亀太郎の上京中、義雄の死に立ち会つたキヨ（妹）とマリ子（義雄の婚約者）は東京見物をし、亀太郎は同業者を訪ねて横浜に出向いていることである。たとえ家族の喪中であっても、観光やビジネスの時間を作っているのは亀太郎らしいドライさ、あるいは妹たちへの気遣いと言えようか。宇和島に帰着後、十二月二十五日に法園寺にて正式な葬儀が執り行われ、二百名以上の会葬者があつたという。

実と義雄という二人の弟を大正期に相次いで亡くし、男兄弟は亀太郎と華宵の二人となった。亀太郎の日記からは、短い語句の中に凝縮された深い哀しみが伝わって来るが、一方で家業や政治活動を怠らない精神力の強さと合理的思考の在り方を見ることが出来る。

華宵もまた、亀太郎、キヨ、マリ子が帰省した後、義雄の死について母親宛に書簡を送っている。

* 此度は義雄の事で定めし御驚きと御悲みだつた事と存じます。誠に定命とは云ひながら、あれ迄に勉強した甲斐もなくかわいそうです。然し、もつとにも致方ないのですから、あんまりクヨクヨなさらない様に。まだ達者な子が数多いのですから、御あきらめなさいませ。（大正十一年十二月二十八日、母チヨ宛書簡）

十四歳で家族と離れた華宵にとっては、兄弟との距離感が、亀太郎の場合とは多少異なっていることを感じさせる。

母チヨは昭和七年十一月十二日に六十八歳で逝去した。死の半年程前から臥せっていて、華宵、ナヲ、キヨなど遠方に住む子どもたちが、相次いで見舞いに帰省したこともあって、チヨも少しは和んだようである。華宵は同年六月と十月に母の見舞いに宇和島を訪れている。実に二十数年振りの帰郷である。

* 鎌倉ノ弟華宵、母ノ病氣見舞ノ為メ二十数年振りニ帰省スルコト、ナリ、（略）午後一時半早くモ来着シタレバ、早速母及ビ妻等ニ対面セシム。母モ大ニ満足シ、病勢モ次第二快方ニ向ヒタルガ如シ。

（亀④、四二三頁）

* 弟華宵モ先般母重態ノ報ヲ見テ再ビ帰省スルコト、ナリ、(略)午後二時当方へ到着ス。母モ其後割合二気分宜シク、華宵及弟子武彦ニ面接、遠路ノ来着ヲ喜ビテ談話ヲ続ケタリ。尚、持参ノ色紙、自筆ノ美人画数葉ヲ母ニ示シテ心ヲ慰メタリ。(亀④、四四二〜四四三頁)

華宵も母の様子を心配してか、頻繁に実家に手紙を送っている。

* 其後母上の御様子は如何でせう。あんまり毎日の書氣つづきなので、病人にはどんなものかと心配致します。過日は早朝に、片瀬の龍口寺へお参りして、御守を頂いて来ましたから、御送り申ます。母上におあげして下さいませ。(昭和七年七月二十七日、義姉セイ宛書簡)

* 母の病氣も案じて居ります。過日の御通知にて衰弱の加る様子 今一度元氣になつてもらいたい氣持でパイです。今日尺五巾掛軸、夏姿美人画箱入郵送しましたから、かけて見せて下さるよう。江戸末期下町娘、母上の若かりし頃、芝居や江戸絵などにておなじみのものですから、今一度若やいでもらへるようになります。(昭和七年八月十六日、兄亀太郎宛書簡)

* 母上の事、氣にかかり乍ら、暫く作画に専念を續けて居りました為、御無沙汰致しました。(略)夕方帰宅して御手紙を拝見して、誠にどうも安じられません。暗い氣分になります、尽せるだけの人力ですから、只此上は天命を待つより他が御座いません。誠に兄上におみ直接の御苦労かけ申わけ有りませんが、尚どうぞ万事よろしく御願ひ申上ます。御飛電次第、帰省いたします。

(昭和七年九月二十四日、兄亀太郎宛書簡)

そして遂にその時となった。亀太郎は臨終の様子を細かく記している。

* 本日毛扨間著シキ異状ナク、午後五時過田中医師ノ来診ノ頃、少時呻吟ヲ続ケ居タルガ、六時十分ニ到リ、

俄ニ呼吸低調トナリ、病勢革マルルヲ以テ数回力ンフル其他ノ注射ヲ試ミシモ及バズ。二十五分殆ド脈搏弱リ、息微力ニ、其間ニ医師、山本ノ伯母、中村夫妻ヲ招キシガ、六時四十五分終ニ溘然トシテ逝去ス。

(略) 病臥ハケ月間身体ハ不自由ナリシモ、発熱及ビ痛ミノ苦ナク、六十八歳ヲ一期トシテ眠ルガ如キ大往生ヲ遂ゲタリ。幼時ヨリ大恩ヲ受ケタル親愛ナル母、終ニ逝ク。誠ニ哀惜ニ堪ヘザルナリ。(略)

母ノ死体ハ之ヲ潔メテ、紋服ニ改メ、病室ニ北枕シテ安臥セシメ、香煙一抹哀愁ヲ蠲ムル所ニ、予等一同悲シキ晩秋ノ一夜ヲ送レリ。(亀④、四五三〜四五四頁)

翌日からは弔問客が次々と訪れ、生糸工場も葬儀のため休業し、四五〇通もの死亡通知を発送して、お通夜を執り行つた。葬儀は十五日に行うこととし、華宵も十四日には再度帰省している。「母ノ死体ヲ清メ、正装シテ寢棺ニ納メタルガ、華宵等対面感慨無量ナリ」(亀④、四五五頁)とあるが、華宵の悲しむ様子が伝わってくる。

その後の亀太郎日記では、いつも通り葬儀関連の事務的な記述が多くなる。また年末回顧の欄でも母の死に触れているが、それほど悲嘆した様子はすでない。

* 幼時ヨリ大恩ノ慈母、殊ニ父ノ死後二十八年間、吾家ノ為メニ特別功績多キ母ヲ亡ヒタルハ限りナキ遺憾事ナリ。只、近年家族ノ円満ト家政ノ安定ヲ見テ、比較的幸福ニ老後ヲ送り、半歳ニ亘ル病臥モ常ニ充分

ナル看護ヲ尽スヲ得タルノミナラス、多年故郷ノ山河ニ遠ザカリシ華宵ヲ始め、弟妹数次ノ帰省ハ痛苦ヲ慰ムルコト渺カラス、満足ト平安ノ裏ニ瞑目シタルハ、聊哀愁ヲ輕クスルニ足ルモノアラン乎。

(亀④、四七〇頁)

母の死についても、実際の感情は別にしても、淡々とした文章が続く日記に比べ、華宵からの書簡には、華宵の想いがあふれている。最初は改まった文体で始まっても、だんだんと筆が進むと、かなり感情に任せたままの記述が見られる。

* 母の死は、却って私の心境に更正の力を加えました。兄上を初めとして、私共の父母の生める児は、たしかに衆人に優越せるあるものをもって居りますが、すべてほんとうの實力の發揮迄には至らず、他の割合で薄幸でもあるようですが、よき頭腦をもち乍ら、春秋多き身を若ふして逝きし実、義雄の分までも、私共は兼つとめ、彼等の天折を無意味にしてはならぬと思ひます。死して大靈に合一せる父母弟等の靈は、私共に其れを希望して居ると靈感します。いささかコーフンの形で恐縮しました。

(昭和七年十一月二十一日、兄亀太郎宛書簡)

明治三十九年、華宵は亀太郎の反対を押し切って高畠久吾(伯父)の養子となっている。しかし久吾の死亡と華宵の素行不良を理由に明治四十一年一月に養子縁組を解除される。この時期華宵は、親戚宅に身を寄せて気ままに過ごしていたようである。勤勉な亀太郎にはこの華宵の生活ぶりが気に入らず、同年五月、亀太郎は二〇円の賤別を渡して華宵を京都へ行かせている。この時に亀太郎と華宵との間には色々と悶着があったよう

で、この年の亀太郎日記の年末回顧欄には「予トノ間依然不和ナリ」と記されている。以後、華宵は母の死まで宇和島に帰省することはなく（挿絵画家として多忙となった為でもある）、亀太郎が商用で上京した際、数回華宵の家に立ち寄っているが、それほど頻繁な行き来はなかったようである。華宵も亀太郎もお互いに何となくグクシヤクとした距離感を感じていたのだろうか。母宛の書簡は残っているが、大正期に亀太郎宛の書簡はほとんど見当たらない。

しかし昭和七年の母の死を契機に、兄弟の親交は復活したようである。葬儀の際も二人そろって会葬者に挨拶をしているが、母を二人一緒に見送ったことで、何かが変わったのであろうか。これ以降、亀太郎は上京の度に頻繁に華宵宅を訪問したり、華宵からも近況を知らせる書簡が定期的に届いたりするなど、母の死は二人の兄弟の人生を再び結びつけたのである。

第三章 戦後の亀太郎と華宵

終戦を迎えた後の二人の人生は対称的である。昭和二十年代以降、亀太郎は公職追放により政治家を引退しているが、他の候補者を応援するなど、後方支援を選挙の度に行っている。家業は戦前より始めた木工業と賃貸業を中心に精力的に取り組んでいた。一方の華宵であるが、昭和二十年代は児童向けの絵本や名作全集の挿絵など定期的に仕事があった。また故郷の宇和島や松山で個展を開催するなどしている。

昭和二十二年十二月、華宵の帰省日程に併せて、宇和島で華宵の展覧会（作品頒布会）を急遽開催することとなったが、結局華宵は軽度の膀胱炎のため宇和島には帰らず、その分亀太郎はその準備や開催中の接客に奔走している。展示会は十二月五日から三日間の開催であった。以下に亀太郎日記から、展覧会開催前後の様子

を紹介する。

* 河野竹三郎君方で骨董商数名と会合。近日来宇の筈の弟華宵の美人画展示会開催に就て、協議の上、此連中の宇和島美術倶楽部で世話せしむることとした。(十一月二十七日)

* 美人画三十点、風景画、花鳥画二十点斗五十点で、孰れも佳作である。美人画を見ていると絢爛を極めて居る。(十二月二日)

* 絵を仮軸に装置し、画題や解説を書く等夜十時迄掛つて略用意が整ふた。(十二月三日)

* 美人画風景画花鳥画等配置がよろしく出来上がつて、場内手狭の嫌はあるが、一応展示会場の形は整頓した。(十二月四日)

* 夜、画展の方へ行く。入場者は多数で人気はよいが、其割合売約は少。(十二月六日)

* 画展の方は本日をして幕を閉じたが、昨日に勝る観覧者で、一時は入場をせき止めて待たす程であつた。売約は依然少し。(十二月七日)

昭和二十六年は、亀太郎の孫で嗣子として養子縁組をしていた重章（亀太郎の長女倭文の長男、亀太郎夫妻が宇和島で育てていた）の大学受験の年であつた。日記には重章に対する亀太郎の期待の大きさをうかがわせる記述が続く。東京の大学を受験の際には、重章は華宵宅にしばらく滞在することとなつていた。

* 午前五時に起きた。重章は今朝六時八分の上り列車で東京へ向ひ出発するので、既に旅装を整へて居り、五時四十分に暇乞して家を立つた。妻と井上晶君が共に宇和島駅迄見送り、予は汽車の通る時間に庭の裏

堀の所に立つて、車窓の重章を見送った（略）。松山から準急行となり、午後二時高松棧橋、岡山から東京行急行に接続して、明朝六時半には大船に着く予定である。（亀太郎日記、同年二月二十日）

* 高等学校へ行つて、重章京大受験のことに關して、大谷、白石両教師に面会協議し、帰宅後重章へ宛て速達を出した。夜九時頃、東京の重章より電報着し、東大の第一次査発表に不合格なりし由、申来る。（略）之に就き、十時迄手紙を書いた。（亀太郎日記、同年二月二十八日）

* 朝、重章へ宛て電報と速達を出した。（略）十時、東高等学校へ行つて、大谷、白石両師と会ひ、重章京大第一次査の合格有無を、学校より京大へ問合せの電報を發し、一方重章へも連絡の電報す。正午頃、京大より重章の受験票到着に就き、午後再び学校へ往復して明日当日の出發、京大へ赴く受験生鈴木に之を託して、京都で本人へ渡すことにするなど、夕刻まで此事に當る。（亀太郎日記、同年二月二十七日）

こうした亀太郎の必死の様子について、重章を預かっていた華宵から書簡が届く。亀太郎の気持ちには分るが、少しヒートアップしすぎて、かえって重章のプレッシャーになるし、本人はよく頑張っているから心配しすぎないようにとの忠告である。

* 三月二日付書拝見、重章君受験について連日連夜御心づかいの様子、よく解りますが、あまりにお考へ過しは如何かと。実は小生其都度お手紙お答へするのは却ってコーフンを強めるかと差ひかへの気持ちにもなっていました。重章君へのげきれいはさる事ながら、本人とても一生懸命の処ですし、其れに何分にも土地不案内の処へ突然出て来たわけで、出入りの毎日、何回もの乗物によるひ労も、若いとは云へ、大変な事ですし、（略）何分にも万事が以前と違ひ、制度等にも過渡期的なものがあつて、青少年が可愛そう

にも思へます。(略)何はともあれ貴兄の思い通りに行かずとも、げぎれいの意味があまりに過ぎぬよう、一つ二つに電報、速達が過ぎぬよう。あまり過ぎると本人も却っていろいろな気持がしますから、其辺お手心お願いします。(昭和二十六年三月五日、兄亀太郎宛書簡)

亀太郎としてみれば、自分が決して為し得なかった大学受験に挑戦する重章を激励し、心配するのは当然であるが、こうしたやや強引な亀太郎のやり方を青年期に経験した華宵としては、当時の自分と重章を重ね合わせていたのだろうか。大叔父としての優しいそして冷静な指摘が印象的である。重章はこの年の大学受験全てに失敗し、一年浪人の後に、昭和二十七年に慶應義塾大学に入学している。

三十年代になると、「大正ロマン」調の絵があまり好まれなくなったこと、漫画が流行しはじめること、若い世代の挿絵画家や漫画家が育って来たことなどにより、華宵の収入が途絶えてしまう。養子縁組をした弟子華晃一家を抱え、経済的に徐々に困窮していく。これと並行して、華宵一家(華宵と養子の華晃、その妻美恵子、子ども二人)の経済状況についての記述が、亀太郎日記に見られるようになる。

* 午後一時、鎌倉より予て通知のあつた充君来着。夕方まで華宵一家の経済事情に就き話を聴き。

(亀太郎日記、昭和三十二年二月二十二日)

* 正午鎌倉へ行き、華宵を訪問した昼食の上、華宵及び充君と話し、主として同家財政の今後の行き方に就き意見を交換した。(亀太郎日記、同年三月二十二日)

この年(昭和三十二年)、華宵は大正十三年から住み続けた「華宵御殿」を手放すこととなった。手紙では

広過ぎるからなどと書いてはいるが、維持管理にお金がかかるのと少しでも現金を得るための売却というのが実情であろう。

この時期、華宵は神経痛などで絵筆を持つのが辛くなったようで、挿絵の仕事もできなくなっていた。養子の華晃は肖像画家として、沖縄や横須賀などで在日米軍人を相手に肖像画の商売をしていた。当初は予想以上の収入を得たが、継続的な顧客獲得には至らず、だんだんと収入が苦しくなってくる。昭和三十四年、華晃が心機一転、新天地を求めてハワイへ渡り、それに続いて華宵も渡米をする（昭和三十四年十一月にハワイへ、翌年四月にロサンゼルスへ移動）。

渡米前から帰国までの詳細については拙著『華宵からの手紙』を参照して頂きたいが、ロスに渡った後も定期的な収入を得る手段はなく、華晃が不慮の事故によって骨折をしてからは、さらに状況が悪化していく。遂には亀太郎に帰国費用を持参（ライオンズクラブの国際大会で同時期に渡米）してもらうこととなった。しかし円を持ち出しが制限されていた時代にあつて、わざわざ高額の旅費を持参した亀太郎を迎えた華宵の態度に激怒した亀太郎は、帰途のハワイ（ワイキキ）から叱責の手紙を華宵に送った。この手紙は残っていないが、かなり激しい口調で辛辣な言葉が並んでいたようで、華宵は後々、この時の亀太郎の言葉について手紙で何度も触れている。

* 貴書によりますと、貴兄折角の御心尽しを他人のなし得る急場の苦心の結晶なるものを、感激の様子もなく平気で受取ったと大変の御不満御叱責で恐縮の至です。私がイスに腰かけていたのが悪かったのか、そのように感ぜられたと云う事は何と云う私の失体、御無礼マダマダでしたでせう。率直にお詫致します。（略）

誠に此の際右を申して御無礼千万ですが、私も貴兄があまりにも私をさげすみなさる御言葉に、（略）心

外に存じます。御心安く御思召せ。宇和島へは骨になつても帰りません。今度の御金も今まだ其位は持つておりますが、直ぐには御返し出来がたいので出来るだけ早く作つて御返却申上ます。私は大変大変にあまかつたのです。(略)よく解りました、御心持を。私は只々生のあるかぎり良き絵を作る使命感があります。其れだけ強く念じて居れば運はいつも開けて来ます。(略)亦々(良い事づくめ)と叱られますから止めますが、私の至らぬ所をドンドン云つて頂けるのは一時はカッとしても大変有難い事です。私はあくまでも貴兄を尊敬しております。貴兄のますます御壮健である事を御祈り致します。

(昭和三十六年七月七日、兄亀太郎宛書簡)

*

貴兄の御手紙の如く、挿画でもかかせてくれと何所の何社に何の面目あつて申出られませう。貴兄が宇和島で体面が御大切なら、私とても財産なくとも私なりのプライド体面は有るはずです。(略)実は前記の如く、寒いにつけ仕事が出来ずイライラするに付け申上に愧いが、貴兄をうらめしくさえ思う事度々でした…。で、当方からは何も申上る事もないと御無沙汰続けていました処、思ひがけぬ亦此度の如き御厚情を示されて、思はず落涙しました。其なら何も前記の如きイヤミをのべ立する必要はないはずですが、遠りよなしに思ひ続けただけを申上たのです。冷酷無情を感じたのもやはり私の方が駄目でした。御許し下さい。御厚情忝けなく嬉しく心にしみます。(昭和三十七年三月十三日、兄亀太郎宛書簡)

兄への敬慕と羨望、嫉妬、苛立ちなど積年の複雑な思いが溢れ出るままに綴られた文面であるが、亀太郎に対する華宵の気持ちの複雑さを感じさせられる。

昭和三十八年二月十一日に華宵が投函した手紙は、一八枚の便箋用紙にびっしりと細かい文字で綴られていて、三日かけて書いたものである。内容はといえば、現在の華宵一家の経済状態が思わしくない現状について、

そこに至るいきさつやロサンゼルスに残っている華晃（充）の追いつめられた現状や人間関係のこと、華宵一家のアメリカへの移住及び永住権獲得についてのいきさつと不透明な見通しのこと、鎌倉の華晃一家、特に経済的苦境によって孫たちの学校生活にその影響が出ていることへの不甲斐なさなどを細かい描写でくどくどと説明している。さらに自分の青年期の苦労話などを交えて、話が行ったり来たりする内容であるが、結局のところ、亀太郎に金銭的援助を請う手紙であった。ある意味で支離滅裂な文面からは、華宵が精神的にかなり追いつめられている状況にあることが推察されるが、「私の最後の文通となるかも知れず」など老いを意識した様子もうかがえる。大変長文の書簡から、亀太郎や故郷の家族に対する思いが綴られている個所を抜粋する。故郷との複雑な関係は、華宵の生涯を通じて常に心にひっかかりを残していたことが解る。

* 要するにすべて私の前々からの処世法の拙なる故と不運とに元因^マするのでしよう。（略）ああ、夭折した実、義雄もあたになまじ優れた秀才持つて生れ乍ら、希望の如く進めず定めし無念であった事だろう。亡き父は無考へに多数の子を産せ過ぎた。貴兄とお春姉上とだけにしておけば、御自分もんな早世せずに居られたでせうに…。あの法円寺前の二階病室で…京美中退して帰った私の頭髮（自分の好で長くしていた）を見て、涙ポロポロ流し、（髪のつみ代）さえやれなかった？…ああ…あの時私は決して子供を作るまいと思った…一つには画家の生活の不安定を思ひ…（二三枚目）

* 其れと昨年後半から出版界、特に少年、少女もの、変動改廃未曾有なものと不況の為とで、何かりバイバル的意向が私には案時的に伝わり、（略）未だ何も具体的に私への話が来たのでないが…、殊によれば私は或は晩年の外国行はせずに、未だ斯の国に使命が残るのではないか…、いずれとも天命を待つのみです。ますます長文重々恐縮します。要するに此所一時の境い目を、何分の御助力頂けないものかと思うのです。

私は最近心配の極下痢を起し（戦争末期の際と同じように）、大分瘦せましたが、眼は全々不自由なく、絵への力はいよいよ若さを失はないので、天の使命未だ残る自信あり、時流幸にしてリバイバル雲霧を得れば、必ず御返却、報恩致せると思ひます。真に厚顔無恥にて重々の恐縮ながら、御意向の如何をお伺ひ致し度いのです。（一八枚目）

ようやく一八枚目にして、本状の目的である金銭的支援の依頼を述べるに至っている。この渾身の長文書簡に対して、亀太郎日記には「華宵から長文の書面が昨日着いたので、意見を述べて金を贈った」（亀太郎日記、昭和三十八年二月十四日）という記述のみである。華宵宛の書簡には何が書かれてあったのかは不明であるが、七月には華宵から大作の金屏風を買い取り、九月に上京の際は華宵宅に寄って近況を話し合っている。しかし華宵一家に現状を改善する力はなく、亀太郎の送金によって、何とか生活を凌ぐ日々がこの頃から始まる。華宵からの書簡では送金願いとその御礼文が続く。

* 其れで度度で何とも汗顔の至ですが、右の通り入金はたしか故、必ず早々に御返却致しますが、5月12日迄に家賃用として3万円御用立願い度いのです。（昭和三十八年五月六日、亀太郎宛書簡）

* 其れで止を得ず亦しても貴兄にすぎるより他なき不面目ですが、此の度は返済期をキツパリ取りきめ出来ない乍らも、少なくとも3カ月以内には前記の如き有望なる諸条件から入った10万金は消耗せずに浮かせると思ひますから、必ず御返済出来る所存です。誠に度々の御無理な申出にて厚顔汗顔、云いようのないなさけ無さですが、折入って左の申出をも一度御聞き入れ願い度いのです。其れはも一度4万円也を五月二八、九日迄に、3万円を六月上旬中に御送金の御手配頂き度（前回とので都合10万円になる）拜借致し度、

(略) 切に懇願申上ます。(同年五月二十日、亀太郎宛書簡)

* 其れで去る七月十一日貴方より拝受した5万円の内、家賃2万5千支払した以外に、前記の如き少々の入金あったので、日常入費の内(電、瓦斯、水道)新聞等月ぎめの他は、日々現金払故に、今日迄は無事過せた上に、残金未だ1万円あり、此れで月末から8月初めにかけ過せますが、其の後が前記の次第で甚だ不安にて、如何すべきか困り入って居ります。実にあまりにも度々で申上度ないのですが、折入っても一度改めて拝借を願ひ度、(略)亦私の方も何とか道が開けそうな氣運を感じていますから、必ず遠からず御返済出来得るものと確信致します。金額はやはり5万円、思ひあまつての御願ひであります。私としても、もう限度を感じます。申しわけない事です。(同年七月二十六日、亀太郎宛書簡)

* 其れで誠に度々で申上難いのですが、前述の条項を御読みいただき、申上る通り良くなる可能性が信じられますので、徐々に御返却の見通しも立てられますので、毎度早急で恐れ入りますが、斯の如く手紙書くにも四、五日以上かかりますので致方なく重々恐入りますが、早急に3万円御送金願ひ度、その上に来月十二月十五日、六日に5万円御送金借用願へれば正月分にも廻せます。

(同年十一月十七日、亀太郎宛書簡)

* 其れで私が：申上度いのは此の前に此れが最後の御願ひと申上たのに対し、何とも申上ようのない苦痛ですが、右の如く予期しない事件で手違いを来したので…、(略)重々重々恐縮ですが、今日納入すべき家賃を入れて(五万円)だけ、是非是非御用立て願ひ度、此度こそ最後のお願ひです。

(昭和三十九年一月十三日、亀太郎宛書簡)

* どうか此れを最後に以後は決して申上ませんから、今一度だけ至急に三万円也を御送金願ひ度、御頼み申上る次第です。全く以て情ない氣持です。(同年六月三十日、亀太郎宛書簡)

* 貴兄へは前回御無理お願いした際、此れを最後にと申上たのに亦しても思はれ際限なきようですが、此度こそは纒々事情申上る如く8月から先は必ず次々と相当の収入が確実に保持継続され得るのですから、其辺何卒御賢察あつて、今一度だけ急場御助力下さるよう伏して懇願申上ます。

(同年七月十八日、亀太郎宛書簡)

一年半近くにわたり、亀太郎への手紙は借金依頼とその御礼のくり返しである。華宵自身はまだ挿絵等の依頼が来ると考えていたようであるが、時代はすでに華宵を必要としなくなっていた。しかし手紙には、借金を依頼する時には「幸吉」と記し、御礼の際には将来への期待と共に「華宵」と記している。ここに華宵の兄への矜持を見ることができる。

しかし事態は極限にまで来ていた。「朝八時、鎌倉の美恵子さん(引用者注…華宵の養子華晃の妻)から電話があり、華宵、充の間不和で、紛糾の事情を生じた様察せられるので、当方から伝送金をした」(亀太郎日記、昭和三十九年七月二十一日)とある。また約二週間後には「鎌倉の美恵子さんからの速達着、家庭の事情、当方犀々の援助に拘らず、依然窮迫の様である。」(亀太郎日記、同年八月七日)という記述がある。ここにきて亀太郎もようやく決断したのである。華宵を老人施設に入れて、美恵子及び二人の子どもは実家へ帰らせるなど、采配を振るっている。

アメリカから帰国後の生活が嘘のように、愛老園では穏やかな日々を送る華宵であった。園での様子を知らせる書簡が度々亀太郎の元に届き、亀太郎もその旨を日記に記し、安堵している様子である。愛老園での華宵は、亀太郎の知人で、入園前から華宵に心を配ってくれていた宇都宮氏(牧師)の尽力により、地元有力者などへ紹介され、翌年一月には明石天文学館にて個展を開くこととなった。この展覧会が新聞で紹介された

ことをきっかけに、東京の弁護士鹿野琢見氏との交信が始まる。

鹿野氏は少年期に華宵の大ファンであり、昭和四十年七月には東京の自宅に「華宵の間」というスペースを設え、華宵を呼び寄せた。その後の華宵は明石と東京を何度か往復する生活となり、松坂屋百貨店（東京上野）での個展や鹿野氏の依頼により絵画制作に勤しむ日々が続き、華宵は嬉々としてその様子を亀太郎宛の書簡に認めている。

しかし老いは容赦なく華宵を襲って来た。昭和四十一年一月三日、松坂屋百貨店での展覧会開催直前に心臓発作を起し倒れた。亀太郎はすぐに上京し、東大病院へ華宵を見舞っている。鹿野氏は華宵復活を画して、精力的に出版社などのマスコミやオールドファンなどに働きかけていたが、華宵には体力的にやや負担であったようである。また明石愛老園での生活も、当初は再びゆっくりと作画に向き合えることを喜んでいた華宵であったが、徐々に園での生活に慣れて来ると、規則や他の入園者との関係について煩わしく感じるようになっていった。

* 鹿野氏は成るべく東京に私を置き度い希望ですが、私には大切な荷物、絵に関するものが第一。画材で現在は東京でも手に入らぬ大事なものが沢山あり、（貴兄は単に私の身体だけが養老院で生きていれば良い）ぐらいの、実に手軽に御あつかいでしたけれど、私の生きるには長年に渡って集めたもの多々あり、（略）鹿野亦是貴兄としても私の微細な其辺の気持はお解りにならぬと思ひますが、私は気が気でなく。

（昭和四十一年七月五日、亀太郎宛書簡）

これが華宵から亀太郎に宛てた最後の手紙となった。この六日後、華宵は再び倒れ、東大病院に入院する。

* 夜九時、東京の鹿野琢見氏から電話があり、月初以来東大病院上田内科に入院中の弟華宵の病状悪化し、危篤状態との知らせにより直ぐ病院へ行くことで、予の二日上京の予定を繰上げること考える。(略) 十時過ぎ、鹿野氏より再び電話があつて、華宵十時十分終に逝去。主治医田川先生の手を尽くされた甲斐もなく、病名は脳軟化症であるとのこと。享年七十八である。(亀太郎日記、昭和四十一年七月三十一日)

華宵死後、亀太郎は即座に上京し、鹿野氏や華晃と共に葬儀の手配や関係者への挨拶など忙しく動き回っている。帰郷後も華宵の埋骨式の準備に奔走し、東京からの来客を迎え、各所で挨拶を行うなどしている。華宵が亡くなった昭和四十一年の日記の最後に記された「一年の回顧」という記載の中には、以下のような一文が最後に記されてある。

* 昨夏中村のハルが亡くなり、本年春以来病臥の華宵が東京で七月末に逝去したので、八人同胞の中、長男の予ひとり尚、壽を保っている訳である。(亀太郎日記、昭和四十一年年末回顧欄)

亀太郎が逝去したのは、華宵の死後六年たった昭和四十七年である。家族全員を見送って最後に逝ったのが亀太郎であった。

おわりに

亀太郎の長男としての責任感の強さと行動力は、家父長制の名残によるものとしてもなお、頭が下がるものがある。自分の不甲斐なさによって、青年期に十分な絵画修業の支援をしてやれなかったという負い目を生涯持ち続けていたのだろうか。しかし、一世を風靡した画家としての華宵への敬愛の気持ちを抱く一方で、浮き沈みの激しい人生を送る華宵を支えているのは自分であるという自負も持っていたのではないか。その思いが時に強引かつ高飛車な言動として華宵に伝わり、華宵の書簡に時たま見られるような兄への反発の感情を招いたと考えられる。

他方、華宵の亀太郎への思いも複雑なものがあつたと推察される。経済人、政治家として成功した亀太郎への羨望がありつつ、どこか兄への競争心のようなものをずっと持ち続けていたのではないだろうか。幼少期に兄と比べられ劣っていることを父親から叱責され続けた華宵は、いつか父親的存在の亀太郎を見返したいという反骨心と屈折した気持ちを抱き続けていたように感じられる。と同時に兄への甘えのような気持ちも生涯持ち続け、「誰かが何とかしてくれるだろう」という他力本願な気質は、青年期の養子縁組（支援金が多く見込めるため、亀太郎の反対を押し切って親戚の世話になった）の頃からすでにあつたが、亀太郎に対しては兄であるがゆえに、さらに依頼心が増したのであろう。

高橋光子は亀太郎を「明治」的気質、華宵を「大正」的気質と述べているが、この二人の人生は、個人的な性格や家族内の私的関係という枠を超えて、日本国家が近代化を押し進める時代を歩んだ人々の複雑な規範や思潮が随所に反映されているように見える。伝統と革新、光と影、理想と現実など、両極でありながら表裏で

もあるものを亀太郎と華宵はそれぞれに抱きながら、兄弟でありつづけたのである。

注

- (1) 川東舜弘『高島亀太郎伝―南伊予政治経済史』、ミネルヴァ書房、二〇〇四年、i頁
- (2) 高島亀太郎『七十七年の回顧』、渋柿圖書刊行会、昭和三十五年、一八七―一八八頁
- (3) 前掲『七十七年の回顧』、一九八一―一九九頁
- (4) 高島麻子著『華宵からの手紙』、愛媛県文化振興財団、一一四―一一九頁